

た。

③ 紬生産と農業余剰労働力との関連は現在でもみられ、それは農閑期において紬生産が増加するという点でも明らかである。しかし、農業の副業としての傾向は漸減しつつある。特に、鬼怒川沿岸の中心的集落では、むしろ「紬の副業としての農業」になりつつあると言える。

地域区分をまとめると下表のようになる。

	組合加入	紬従事内容	織機	農業・その他
A-a	○	製織・染色・緋くくり	いざり機	農家率低く、紬が主体
A-b	○	製織・染色・緋くくり	いざり機	農家率高く、紬が主体
A-c	○	製織・緋くくり	高機	農家率高く、農業が主体
B-a	×	糸つむぎ	織機なし	通勤兼業多く、養蚕あり
B-b	×	糸つむぎ	織機なし	海拔30m以上、養蚕あり
B-c	×	糸つむぎ	織機なし	海拔30m以下、養蚕なし

我孫子市の都市化

井上玲子

(1) 研究の目的

東京圏の拡大に伴い、東京の南から時計回りに都市化が進み、現在は最後にとり残された東京の北東部に都市化の波が急激に押し寄せている。我孫子市は、その北東部、常磐線沿線にあって、現在、急激に変化している地域の一つである。東京の北東部の都市化が遅れた理由を考えつつ、近年の我孫子市の急激な都市化について考察することをこの論文の目的とする。

(2) 研究の枠組

方法としては、まず、東京大都市圏の拡大の中での我孫子市の位置の変化をとらえ、次に人口と土地利用の2つの指標によって我孫子市の都市化を分析し、具体的な動向を把握した上で市内の都市化の地域差をみる。この3つの段階をふまえて、我孫子市の都市化の総合的考察を試みる。

(3) 研究の結果

農村であった「我孫子」が東京近郊の住宅都市として変わっていったのは、この10年ほどの間である。都心から30～40kmのところであれば、中央線沿線や東海道線沿線では、昭和30年代半ばには、もうかなり都市化が進んできていた。しかし、我孫子市は、交通条件、地形的条件、土地選好性などの最も劣った東京東郊にあり、都市化が遅れ、農村としての位置を長く保っていた。ところが、東京大都市圏はますます拡大され、交通条件の改善などによって、都心からの方向別の都市化条件の差異は小さくなってきた。そして、昭和40年代にはいと、比較的安い土地が広く残っていて、大規模な開発のしやすい東京東郊に都市化の目が向けられてきたのである。そうした中で、昭和45年、我孫子市(当時はまだ我孫子町)にも住宅公団が進出して、都市化の大きなきっかけをつくった。昭

和 40 年頃から都市化が徐々に始まっていた我孫子町では、行政側が住宅公団の進出に積極的な受け入れ体勢を示していた。近郊農村としての限界を感じ、都市化による経済発展を期待していたのであった。この公団住宅「湖北台団地」完成とともに市制を施行し、それ以後、急に活気づいた我孫子市は、いわゆる東京近郊のベッドタウンとして発展した。湖北台団地完成は交通の発達を促し、また、その交通の発達が、新たな大規模宅地開発を次々と呼び起こした。同じ市内でも、都心から時間距離のある布佐地区では、都市化が遅れており、農村的景観がかなり残るが、純農村地域であった湖北地区は、公団進出により、環境整備の進んだ典型的な新興住宅地になった。また、従来のもっとも発展していた我孫子地区でも、既成市街地の外延的拡大だけでなく、常磐線沿線の大規模宅地開発が進められている。人口は、昭和 40 年 10 月に 33,216 人だったのが、52 年 10 月には 88,173 人となっている。

我孫子市はこれまで、環境の良い住宅地として人をひきつけてきた。松戸市のように都市化による悪影響はまだそれほど現われていない。今後も、人口急増の予想される我孫子市としては、綿密な都市計画によって、自然の改変や人口の増加によって起こる問題を最小限にとどめ、“環境の良い住宅地”としての位置を保っていかねばならないと思われる。

松江市の市街化と都市機能

宇津巻 睦 子

松江は江戸時代十八万石の城下町として、当時全国でも数少ない三万の人口を持つ都市であった。しかし明治以降、都市の発展はゆるやかであり、相対的に小さな都市となっていった。そのため市街地の拡大もわずかで、城下町のなごりを留めて現在に至った。城下町から出発した松江が、どのような変遷をたどって現在にいたったか、現在の地域構造はどのようなものか、又、人口が急増しているとはいえ全国の県庁所在地に比べ増加率が低いのはなぜか、などを考え、松江の都市としての性質を明らかにするのが論文の目的である。

第一章で地域の概観を述べ、第二章で、人口の推移を指標として次の 4 つの時期、(1)江戸時代・人口漸増期 (2)明治時代・人口停滞期 (3)大正～昭和 40 年・人口漸増期 (4)昭和 40 年以降・人口急増期、に時代区分し、それぞれの時期の市街地の拡大状況、地域構造の変化など地形図・市街図から読みとり、市街化の変遷を考察した。第三章で、松江の工業、商業機能や都市圏の問題を、統計操作を中心に考察した。第四章で、松江市の地域構造の現況をフィールドワークからまとめた。

市街化の変遷：江戸時代は、武家地、町屋、寺町と政治的計画的に居住区分がなされ、機能の分化した地域構造であった。明治時代は、人口は停滞しており、市街地の拡大はみられなかった。上級武家地であった殿町に役所や学校が建てられ、それらを核として城下町の地域構造から近代都市の地域構造へと、地域が再編成された。大正～昭和 40 年は、明治 41 年、市街地をはずれた水田に鉄道駅が開設されたことを機に、駅の方向に市街地の拡大が始まった。他に市街地の拡大はみられず、この時期は、都市の発展が停滞していたといえる。昭和 40 年以降、人口の増加に伴い、新しい市街地が主な